

氏名	い 李 よん 英 み 美
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博甲術第18号
学位授与の日付	平成20年3月31日
学位授与の要件	学位規程第5条
学位論文の題目	民俗宗教(巫俗)を通じてみる韓国の庶民文化 —柳田国男《女性と民俗宗教》と比較して—
審査委員	主査 今泉 喜一 副査 金田一 秀穂 副査 楠家 重敏

### 学位論文の要旨

本稿の主な研究対象は、韓国庶民文化への接近方法として選定した韓国の巫俗である。巫俗研究において、祭儀の主催者は重要な役割を担うため、ムダンも研究の対象と言える。韓国の巫俗研究における学的体系形成は、1900年前後の開化期から1945年解放当時までは西洋人、日本人、韓国人などそれぞれその文化的背景と研究の動機が異なる人々によりなされた。研究者たちによって、巫俗を捉える観点や研究方法、解釈の基準などは大きな差を呈している。

本稿は、それぞれの時代における社会や文化伝統から生まれた普遍的でない特殊な巫俗文化、すなわち庶民文化に関して考察した。しかしながら本稿では、時代を1945年頃までに限定し、激しい時代の変化のなかで巫俗がどういう形態でその時代を乗り越えながら、その存在を失わず、韓国人の心性の底辺を流れてきたのかを明らかにすることに目的があった。

本稿において巫俗は、研究の対象でもあり、研究の方法でもある。すなわち巫俗に関する考察、分析という意味において、巫俗は研究対象である。ところが、巫俗を通して韓国庶民の文化かつ韓国人の心性を理解しようとする意味において、巫俗は一つの研究方法にもなっている。

柳田国男は韓国巫俗研究の初期において、きわめて大きい影響を与えた。本稿の考察では、その点を重視し、柳田国男の民俗宗教とりわけ女性である巫女との関連性を分析した。民俗宗教、巫俗、ムダン、巫女を取り巻く文化的あるいは社会的、歴史的意味がそれらに表れると考えたのである。

もちろん、このような目的が小論で十分に達成できたとは思わない。また多くの問

題が今後の課題として残されている。しかし民俗宗教である巫俗は国家的な次元においても、民族の精神的なエネルギーとしても、昇華させる方法を検討しなければならないと考えられる。

本稿は総5章の構成からなっているが、以下には各章の間の関係や全体的な要点を挙げることにする。

第1章「巫俗研究概観」は、巫俗が有する民俗的意味を重視しながら、庶民文化の観点で巫俗を扱うことにした。巫俗は、その相当部分が民俗と共通する内容を持つ信仰という点を重視すべきで、韓国の庶民文化として理解する研究方法が必要であった。したがって、本章では文献資料を分析検討し、総合するという方法で考察しようとした。その結果、巫俗が、韓国で最も古い民俗信仰であることが確かであり、巫俗と韓国文化は密接に関連しているということがわかった。

第2章「巫俗の定義」では、巫俗を巫の定義と巫の限界に即して見る時、巫を中心にした庶民層の伝承的な宗教的現象であることを中心に考察した。ここで、庶民層の伝承的な宗教的現象は、庶民層が生活を通して伝承する自然宗教的現象、すなわち民俗宗教の一形態であるという手がかりが得られたと言える。ここには、ムダンが直接管掌する「クッ」を中心として伝承され、「ムダン」を除いても行うことが出来る巫俗的思考を基盤とした伝承的信頼が含まれるのである。

なお、韓国人の巫俗概念は道徳的価値を立て、徳目を強調し、理念体系を立てる‘建前の祈祷’というよりは、身振りと宴喜で成り立つ飲酒歌舞として神霊を楽しませるか、または天変地異の到来をあらかじめ理解することで不幸を予防し、新しき良き時代を念願する民間民衆の窮極的な解答探しである‘身の祈祷’であると言える。

第3章「韓国巫俗の原型問題」では、巫俗に対する根源的質問で、何が巫俗現象として現われるようになったのかという問題に関して述べた。巫俗の究極的な意味を探るためには、巫俗の原型を捜さなければならないからである。また、祭儀は神によって成り立った天地創造行為の模倣で、それを繰り返すことであると理解される。

本章では、巫俗の宗教的指導者であるムダンに関して考察した。ムダンは人の恨みごとを晴らし、またその人の代わりに祈福の儀礼を行う者としてしか理解されておらず、何よりもムダン自身が神になることで、自分自身の恨みも晴らしているということを見逃しがちである。なお、ムダンと日本の巫女との呼称、類型、祭儀の特徴を比較分析した。とりわけ、巫歌を通じ巫俗において最も重要であるといえる死の問題においては、柳田国男の「先祖の話」の死者と遺族の関連を比較し考察した。

去る100年余りの間に行われてきた巫俗研究を整理し、これからの研究課題と方向

を模索する第4章では、時代と共に変遷するプロセスを記述した。

第4章「巫俗の時代による分類」では、1、2、3章で考察した韓国庶民の巫俗とムダンに関する論述を元にそれぞれの時代における巫俗の変化を説明した。

韓国巫俗の体系化のためには、まずは不完全であっても時代区分に関する議論が必要であると考えられる。檀君神話を含めて、韓国の古代国家の建国神話は皆、宗教的祭儀の表現であり、信仰的行為である祭儀の名分で高句麗の同盟、濊の儸天、夫餘の迎鼓、三韓の祭天などの記録が収められている。

古代で最も重視すべきことは、仏教の伝来により巫俗が庶民社会に浸透するようになったことである。A.D 4世紀後半に伝来した仏教は、三国時代を通じて徐々に巫俗より優位性を確保していく。巫俗に比べて、仏教は思想の体系性、文化的先進性においてまさっていたので、国王を含めた支配層の関心が仏教に傾いたのである。その過程の中で、新羅の半島統一を前後して仏教の地位は高まり、遂に仏教の優位性は揺るぎない地盤を占めるに至る。その結果、巫俗は庶民社会への沈澱を始める。

中世には、新羅末期に始まった個人中心の巫俗、邪悪なものを追い出し、良いものを招くという今日のムダン信仰が発展した時期である。

韓国巫俗史において近世は、16世紀朝鮮初期に森林に入って儒学研究に力を入れた文人の一派である士林派の集権で始まる。この時代の巫俗の特徴として社会的機能を喪失したという点をあげることが出来る。士林派勢力が集権しつつ、巫俗の迫害を押し進めたのである。巫俗を片端へ押し出すのに汲汲としていた結果、結局儒教の例祭の改革は、庶民の宗教文化の啓蒙に失敗したのは勿論、むしろ庶民と遊離した保守化の過程を辿るだけだった。

次に、「巫俗を母胎に生まれた韓国近代の自生宗教」では、激しい時代の変化に対し自生宗教が庶民にどのように近づいていったのかを論述した。韓国で生まれた大部分の自生宗教は、全ての宗教が志向する真理を究明しようと試みた。つまり、全ての真理が包括されたとき、また融合されたときに、宇宙の真理に最も近づいたと見なされる。このような姿勢は、韓国人の包容主義をよく反映していると言えるだろう。巫俗の平等的包容主義と、自生宗教の統合的包括主義を確認することにより、巫俗と自生宗教は韓国民族の思惟特性をよく反映していると言える。

また、自生宗教が庶民に広がった理由として伝統に対する批判的検討において既存の儒教思想と社会制度に対する批判とともに庶民の土着的な固有宗教に対する新しい関心が浮上したことが考えられる。

第5章「日・韓における民俗宗教と女性」では次のようなことを論じている。4章の最後に述べた巫俗に関する否定的考察から伝統を否定することは容易である。しかし新しい価値創造のために、伝統を再評価し、肯定的な理論を展開させていくことは非常に重要であるが、また困難なことでもある。特に迷信的であるとみなされ、排撃

される巫俗のようなケースでは、それらはなおさらのことであろう。なお、庶民の信仰や宗教職能者の姿を明瞭に記述することは、そう簡単なことではない。ましては、それが女性の司祭者であるムダンが主催する巫俗の問題となると、極めて難しくなる。

しかし女性の役割を韓国社会において巫俗の祭儀を行う主役であるムダンとして、韓国社会や文化にとって重要な役割を果たしてきた存在として位置づけることは、最も重要な作業であると考えられる。

このような見地から第5章では、韓国女性と巫俗信仰の関係を分析し、巫俗の歴史の変遷を探究した。その盛衰と女性の社会的地位の変遷の考察からこの信仰の現代的意味を探ることにその焦点をおいた。巫俗は、家庭で巫俗信仰が内包する非合理的な価値を通し、女性が抱える不安と不満が多い時代にその意識の代弁を可能とする。また、無意識的な宗教的欲求を内面的に敬い、昇華させることで精神的支えを持てるようにする。

洞祭は、地域共同体の祭政一致的な民間の祭り行事である。それは女性達に協同強化意識を生じさせる。また祭りの雰囲気を経験させることで、家庭に縛られている女性にカタルシス的な効果をもつと言える。

女性は貧困を運命だと諦めることなく没落せずに、真心で神霊を崇拝することで神霊を感化、感動させ、生活苦を逆転させようと願った。宇宙万物を主管して人間の吉凶禍福を管掌する神霊を絶対的に信じていたのである。新しい文明が押し寄せ、彼らが教え導く迷信打破が韓国の固有の文化の抹殺政策で崩れ行くなか、民族意識の自尊を守ったのは、無知な女性たちであったといえる。

## 審査結果の要旨

【論文の内容】 本論文は韓国庶民文化・韓国人の心性を理解するために、巫俗を民俗宗教として位置づけて考察している。まず①「巫俗研究概観」において、先行研究等文献資料から、巫俗が韓国で最も古い民俗信仰であり、韓国文化に密接に関連したものであることを確認したのち、②「巫俗の定義」において、柳田国男等の日本民俗学との比較検討をもなしつつ、巫俗を古代の自然宗教が非組織的に継承されて成立したもので、理念体系を立てるよりは、飲酒歌舞により神霊を楽しませて良きことを願う、民衆の究極的な信仰形態であると述べている。そして、③「韓国巫俗の原型問題」において、そのような信仰形態・儀式による精神の高揚で得られる神と人々が融合する神秘を通じて、カオスからコスモスの形成されることを祈願するのが巫俗の根元であると論じている。この韓国巫俗を体系化して研究するためには④「巫俗の時代による分類」が不可欠であるとし、時代を追って論を進めている。また、この100年ほどの間に行われてきた巫俗研究を整理し、今後の研究課題と方向を模索している。⑤「日・韓における民俗宗教と女性」においては、日本と比較しつつ、巫俗の歴史の変遷の中

で韓国女性と巫俗信仰の関係を分析しており、巫俗の盛衰と女性の社会的地位の変遷の考察から、この信仰の現代的意味を探っている。

**【論文の意義】** 最近、韓国でも比較民俗学という観点から日本民俗学が扱われるようになってはいるが、断片的な研究にとどまっている。本論文では民俗宗教の正面からの比較分析を行い、日本と対照しつつ韓国の大衆の心性を読み解くことを試み、これをもって日韓両国の相互理解への貢献を目指している。ここにこの論文の意義が認められる。

**【論文の評価】** 従来、学的に扱われることのほとんどなかった巫俗を民俗宗教として研究し、議論を深めたことにより、今後この分野での論議を活性化させることが期待できる。また、比較研究を通じて、両国の民俗宗教研究の領域的拡大に貢献している。この2点が高く評価できる。